
バカとリンと召喚獣

風影 黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとリンと召喚獣

【Zコード】

Z0900Z

【作者名】

風影 黒

【あらすじ】

試験召喚獣システムが使われた試験校、文月学園。そんな中、Fクラスに所属することになった黒井小鈴。幼なじみの吉井明久と共に勉学とオカルトと恋（？）に忙しい学園生活をどう突き進む！？

プロローグ（前書き）

処女作となります。
少しでも楽しんでいただけたら嬉しいです。

プロローグ

文月学園に入学して二度目の春がやつてきた。

校舎へ続く坂道を歩く人影がチラホラ見えてきた中、普通の人らしくない集団に囲まれている人影があつた。

肩の辺りがボサボサに切られている赤い胴着を着ている武道家。下駄にリーゼント、学ランと昔のマンガから出て来た様な不良（口には葉っぱ）。剣道着を着てる者。薙刀を構える女性や覆面に鎌をもつて愛を叫んでいる者（？）。どう見ても普通じゃない空間が文月の登校路で起こっていた。

だが、周囲にいる登校途中の生徒達は誰も目を向けない。気にもかけずに坂を登つっていく。

それもそのはず。なにせ、普通じゃないこの空間がここで起るのによく（・・）ある事だから。

そして、集団に動きがあつた。

「……今日こそ、今日こそ勝たせてもらひやぞ、『黒子』……」

「いや」

「…尋常に」

「「「「「勝負……！」」「「「「一人、一人、果てには全員が雄叫びの後、中心掛け走り出す。その表情には決死さえも見えるようだつた。

さて、中心にされてしまった人物はと言うと。焦つた様子も見せていない。手に持つていたカバンを足元に落とし、指で眼鏡にかかる銀髪を払いながら、接近してくる人々を見ている。

そして…

「……ニヤハ！」

鈴の音と共に姿が消えた。

「西さん、二一ハオ」

玄関前で生徒達に封筒を配つてゐる先生の中でも田立つ、浅黒い肌で短髪、去年の担任である先生に挨拶をする。

「……二一ハオは朝の挨拶じやないぞ。それに、西村先生と呼ばんか、黒井！」

西村宗一郎。別称、鉄人。生活指導の鬼と呼ばれているが、去年から親友や悪友のおかげで学園で一番親しくなつた先生だらう。

「そうでした。すみません、西さん」

それでも変えないから溜息混じりでこちらを見る。半ば去年から変わらないやり取りで根負けしているのだらう。

「それとだ、黒井」

西さんが視線をずらして今登つてきた坂道に田を向ける。

「あれはまたお前か？」

「ん~、でも誰にも触れてませんよ？」

視線の先には先程の人々が倒れて山積みにされていた。

「……まあいい。ほら、お前のだ」

そう言つと箱の中から一枚の封筒を手渡す。

「ありがとうございます。……中身はわかりますが」

「そうだな。しかし、お前のやつた事は人として誇れる事だ」

「……それでは失礼します」

頭を下げ、脇を通り抜けていこうとするが足を止め、再び話し掛ける

「西さん。カンなんですが今年もお世話になります」

「……ということはあいつらともか、ヤレヤレ」

お前のカンはよく当たるしなつと深い溜息をつく西さんに苦笑しながら今度こそ下駄箱へと向かう。

「……誇れる事、ね」

取り出したペーパーナイフで封筒を開き、中についた紙を引っ張り出す。

『黒井小鈴……Fクラス』

「オレはそんなんじゃないよ」
いつして最低クラス生活が幕を開けた。

プロローグ（後書き）

お世話になりました。良い作品を作れるよう、訂正、感想、アドバイスなどを書いていただけたら嬉しいです。

プロファイル（前書き）

プロファイルです。
少しオリジナリティを特殊にしてみました。

プロフィール

プロフィール

黒井小鈴（くろい こすず）

銀髪ショート 眼鏡 猫（虎？） 明久に忠臣？

身長、明久より10？ぐらい低い

体型 細型だが鍛えているから女子（-！）としては少し重い

特技、暗算、嘘発見、手品

苦手、嘘をつくこと、怖い話

性格、明久を中心に回ってる？ 多人格

一人称ー二人称ー三人称、オレーお前ーあいつ

明久に恩があるので明久に尽くしたいとすら考へてる。

恋 無双の華雄さんに眼鏡をかけ、胸なしな感じ。目つきがきついのもあつてあまり女子らしく見られず、楽だからと男子の制服を着用。

明久の上の階に一人ぐらし。明久と家族で知り合い。

プロフィール（後書き）

お世話になりました。

ということで、オリ主は男娘と書いて（オトメ）と言つのを指してみます。

アドバイス、訂正、感想は大歓迎です

Ⅰ 四四（一）学年・試合戦争、開始）（繪書セ）

更新です。

鈴がFクラスの面々とじりつけた感じなのかをだしましたが…予想より長くなりました。

簡潔にまとめる他の作者さん達を尊敬します。

…こちらも長くなつてしましました。

楽しんでいただけたら幸いです。

一話目（一学年・試験戦争、開始）

「……大戦時代か、ここは？」

真っ直ぐ旧校舎に向かい、Eクラスらしき教室の前にやつて来たのだが……

「ちやぶ台（脚折れ少々）、座布団（中身スカスカ）、窓は割れて何故か×印にテープ……ここだけ『欲シガリマゼン、勝ツマデハ』の時代に来たか？」

おまけに天井にはクモの巣、教室に敷き詰められた古い畳はかび臭い上、キノコが生え、壁にひびと落書きで埋め尽くされている。正直、廃校の方がましじゃないか？

「ん？ そこに居るのは鈴か？」

呆れて教室を眺めていたら一人の生徒がこちらを見て手を振つていた。

目を向ければ去年のクラスメート、女子が羨むスラつとした身体。女性が嫉妬しそうな優しい微笑み。男性を虜にしそうな癒し空間を漂わす木下秀吉（ ）がいた。

「ん？ 主、妙な事を考えなかつたか？」

「んにゃ。去年と同じくだなつて思つただけさ。じぱりくぶり、ヨシビデ」

「ワシは秀吉じや」

「羽柴の？」

「木下じや」

「徳川は？」

「秀忠じやな」

『イエ～イ』

「あんたらまたやつてるの？」

軽い掛け合いをしていると一人が呆れたようにしながら声をかけてきた。

見てみれば友人がいた。

おはよう、スズ

「お世話を、どうもありがとうございました。」

スラッシュしたモデル体型。ポニー・テール。帰国子女の友人、島田美波。挨拶を返すが二ツコリ笑つたかと思つたらこちらの腕を掴み…

「やつぱりつて何!? ウチがバカだつていいたーの!!!?

「朝から元気めはきつい、キブキブ」

のれには奈良おにじだ

「ミナ、江戸幕府が開かれたのは何年?」

...]

卷之三

卷之三

すみませんでした

第六章 中国古典文学名著与现代传播学研究

変化するから言わない。

「それと早く解かないとムツチーが覗いて来るぞ？」

「観てやう」

「鼻血で畳が赤いぞい」

いの間にいたのが小僧
後醍醐天皇の御内侍
力又小僧 士屋殿力こと

「……おれはスケベじゃない」

何色たゞ

怒声と共に身を伏せれば頭上を美波の右足が通る。髪を一、三本持つていき、その威力を感じさせる。

「あ、あんたら……こんな場所でなんてこと言ひつの……？」

「誰も誰の、何がとは言つてないが？」

「……誘導尋問は卑怯」

「誘導と尋問、まとめて辞書で調べてこい」

「お~い、そ~。悪いが騒ぎはそこまでにしてくれ」

じゃれあいがそこそこになつてきた所で声がかけられた。見てみれば教壇に赤髪、長身の奴がこちらを見ていた。

「……なんだ雄ツーか」

「待て、ツーってなんだ？俺はロボットじゃないぞ？」

「んじゅじゅ」

「変わつてないぞ！？雄がしに変わつたぐらいだぞ！？余計ロボっぽくなつたぞ！？」

「えつ！？違うつけ、戦闘用・アンドロイド、サカモト・じゅ。モデル、悪鬼羅刹」

「それつぽく付けるな！？つてか1がいるのか！？別モデルがあるのか！？」

「つでなんで教壇に立つてんだ？」

「話をいきなり戻すな！？……ああ先生が遅れているらしいから、代表としてまとめとこうと思つてな」

こいつが代表であるのを驚くと同時に以外な行動に感心した。

野生児、狂暴、外道。去年からの悪友、坂本雄一。それがFクラスとは言え、代表として行動をするのが意外に思……

「それに俺の兵隊になる奴らの顔を見ておきたかったからな」

訂正、やつぱりこいつはこいつだ。

「それはそうと、あのバカはまだ来てないのか？」

「……来てないけど、あまりバカバカ言つな」

「事実だろ？」

「……なら、誰かさんが黒髪、長髪の撫子美人さんと仲が良いって事実を言い触らしても事実だからいいよな？」

「なつ！？待て！！お前、何処でそれを！？」

「さて、こここのクラスから始めるか」

「待て！！」

「皆知ってる？」
「い、あのきり「すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ」
「ませんと…つて」

出鼻をおもいつきり碎いてくれた人物は、ネジが一本抜けたような表情。ちょっと中性的な顔。イジられやすい雰囲気。そして、学園内、唯一の肩書きを持つもの、吉井明久がいた（遅刻）。

「…リンに雄一、何やつてんの？」

「…ハツ、早く座れ、このウジ虫野ろウオオオオオオオオ…？」
「スダタタタタタタタッ…！」

明久を罵倒しようとした雄一だが飛来物によつて中断され、膝をがに股に開け、両手を股間に持つてきました奇妙なポーズで固まっていた。雄一の皮と制服すれすれの所に鈍い光を放つ大量の苦無と手裏剣が刺さつていた。そしてそれをやつた犯人は……

「つテメー、何しやがる！…？」
「…スマン、条件反射だ」

オレである。

一話目（1学年・試合戦争、開始）（後書き）

個人的に、猫は気まぐれで掴み所がないとおもってます。アドバイス、感想などいただけたら嬉しいです。

プロフィール+（前書き）

オリ主が想像しにくいので追加します。

プロフィール+

小鈴の容姿、召喚獣について

容姿、恋 無双の華雄に文月学園の制服（男子）を着用。外見からの見た目は胸なしにしてください。

眼鏡着用。

首に鈴付きチエッカーを付けます。

手袋を付けています。

手袋着用などの理由や秘密は作品中で少しづつ出していきます。

召喚獣

華雄です。ただし、武器は戦斧と鉄扇を片手ずつに持っています。能力はCクラス上位くらい。

得意科目… 数学、170～200

苦手科目… 国語、80～110

他は130～160ぐらい

クラス基準

Fクラス… 900未満

Eクラス… 900～1200

Dクラス… 1200～1500

Cクラス… 1500～1800

Bクラス… 1800～2000

Aクラス… 2000～

(Aクラス上位3000以上)

科目数… 10 (国語、古文、数学、化学、生物、物理、保険体育、

英語リスニング、英語W）と考えます
他にも何か変更、追加ができたら「チラに追加します。

プロフィール+（後書き）

質問などがありましたら回答をいつでも追加します。

1.1 話題（前書き）

なんか、伏線だの謎だので時間がかかってしまいました。

お気に入り登録してくださつて方々がいらっしゃいました。ありがとうございます。

それでは、楽しんでいただけたら幸いです。

〈バカテスト、化学〉

【第一問】

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミニン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのです
が、姫路さんは引っ掛けませんでしたね。

黒井小鈴の答え

『問題点……マグネシウムだと炎色反応を起こすから危険

合金の例……ステンレス鋼』

教師のコメント

正解です。ステンレス鋼は鋳に強く、包丁にも使われるやつです。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払つていなかつたこと

合金の例……酸化鉄』

教師の「メント

そこは問題じゃありません。さうに、鏽だらけの鍋で料理するつもりですか。

吉井明久の答え

『問題点……花火みたいに火花がでて、家が火事になる
合金の例……未来合金（　すごく強い）』

教師のコメント

問題点は一応正解ですが、確かに花火にマグネシウムを利用しません。後、すごく強いと言われても。

「それについても……流石はFクラスだね」

「半ば病気になれ。もしくは、バカは病気にならんって言わんばかりだな」

「テメーら、ほのぼの会話してんじゃねえ————！」

教室を眺めながら互いに溜息をつきあつていると後ろから怒声をぶつけてくる輩がいた。

「あれ？ 雄一、いつまでビートたけしのギャグやつてるの？」

「そういうえば明久知ってるか？ ビートってのはてんさいといつ野菜のことで、天才たけしつて意味合いを持つているんだそうだ」

「へえ～」

「だからほのぼのしてるな……それと好きでやつてんじゃねえ……！ 鈴、いきなり何しやがる！ ！ ？」

「……仮の顔は三度までという諺がある」

「ん？ ああ……」

「オレの顔は明久までだ」

「どんな限界だ！？」

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

不意に明久の陰から覇気のない声がした。

覗き込めば弱々しい風貌をしたオジサンが入口で立ち往生していた。ようやく担任が来たみたいだ。

「それと席についてもらえますか？ホームルームを始めますので。

後、教室であまり暴れないよう、色々と壊れやすいですから」

「はい、わかりました」

「すみません」

「さつわと外せ……」

耳元で「あやんあやん騒ぎ立てるのを無視したい所だが先生に迷惑がかかるので助け出しておいた。

そして、他のクラスと比べて遅いホームルームがやっと始まった。

「え～、大変お待たせしました。おはようございます。一年F組担当となりました……」

「先生、どうぞ」

「ありがとうございます。黒井さん」

「イエ、初回特典の名刺代わりです」

黒板に名前を書こうとしていたが、まともなチョークすら用意されてなかつたので商品の（・・・）チョークを先生に手渡し、席に戻つた。

「改めまして、担当の福原です。よろしくお願いします。さて、Fクラスの設備について確認します。皆さん全員に「やぶ」と座布団は支給されますか？不備があれば申し出て下さい」

環境が不備だらけだと思うのだが……。

「センセー、おれの座布団に綿が入つてしません

「我慢してください」

「センセー、ちゃぶ台の脚が折れます」

「木」ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょ」

+ 対応も不備だらけか。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

「！！先生、必要と思った物を自分で調達していいんですか？」

「ええ、Fクラスはそういう事になっています」

「わかりました。ありがとうございます」

聞き逃せない言葉を再確認して、携帯でしつかり言質を保存していく。これで色々とできるだろうが……時間があればクラス設備設定と校則の隙間の再確認とかも調べておこう。

『リン？ 何する気？』

思案を巡らしていると前にいた明久が振り返って、こっそり耳打ちをしてくる。

『此処じゃあつといつ間に病気になる。色々持つてきてマシな状態にするついでに、活用させてもらおうと計画中』

ピンチをチャンスに。短所を長所に改造するのが師匠の教えだから。使えるものは親や熊でも使おう。……熊はともかく、の人らはオレでは無理だな。

『そろそろ静かにしておけ。先生に目をつけられるぞ？』

『あ、うん』

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

先生の指名により、生徒の一人が立ち上がった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

独特な口調の秀吉が最初だった。しかし、男ばかりのこの教室で秀吉の周りだけ空気が澄んでいる気がするんだが。

「……と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

軽やかに微笑んで自己紹介を終えるが、三分の一ぐらいの男子が顔を赤くしているか？ 明久が念佛を唱えているみたいだが何があつたんだ？

「…………土屋康太」

後ろを気にしていたら次の生徒、ムツチーが立ち上がったかと思つたら、名前だけ告げてすぐに座つた。そんなに目立ちたくないか？ そういうえば、返さないとならない物があつたが後でいいか？

「 - - です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きは苦手です」

鞄に押し込んでおいた物を見ていたら次の人が

ユラユラと揺れるボニー テールは……

「趣味は吉井明久を殴ることです」

それじゃドＳの人だぞ、ミナ。笑顔で明久に手を振つてゐるが正直、天敵指定されても仕方ないんぢやないか？

しかし、冷静に周囲に視線を見渡してみれば、けつこう顔見知り以上が多いが……偶然ということにしておこう。

淡々と自分の名前を告げるだけの自己紹介が進んでいき、明久に回つてきた。

「——コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

『ダアアアーリイーーン!!!!』

野太い声の波動にやられて今にも明久が崩れ落ちそうだ。正直、余波だけでも不快な気分になる。ダーリンつて鬼娘とおにじつこやつて、電撃喰らいながらもナンパを続けた奴になるつもりか？

「——失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願ひ致します」

ダメージが深いのだろう。明久の口調が若干おかしい。

そして、ようやく順番が回つてきた。

「まあ、目立つのは嫌だから必要なことだけでいいか？」

「黒井小鈴です。親友の明久に何かしたら、……楽になれると思わないように」

最後の言葉は少し小さく言つてが上手く全体に聞こえてくれたようであ、一時的に教室が沈黙で満たされた。

『——ざわざわ - - なあ、あいつの名前、なんか女っぽくないか？』

「ソソソと話しかめたので席に戻りついたが、……一応、それも対応しどとか？」

「後、オレは生物学上、女なので間違えなく……」

『……………ハアツ！？』

『おい、あいつ、何言ってんだ？』

『どこをどう見ても男だよな』

あ～、知らない奴らが騒ぎ出した。別に自覚してるからいいが悪かつたな、女成分皆無で。

「……………あんたでいいや。これが証拠」

『ん？ 学生証？（黒井小鈴、性別・女性）……………？』

『まぢか、野々村！？』

『……………本當だ』

『……………つてか、今気づいたけどあいつ、【店】の黒井じやねえ？』

まずい、終わりが見えなくなってきた。

いかにして終わらせようか悩んでいたら教室の扉が突然開けられた。

「あの、遅れて、すいま、せん……………」

『えつ？』

息を切らせてやつてきた女生徒の姿を見て、教室から驚いた声が上がった。

それもそうだらう。彼女がここにいる訳が無いからだ。事情を知らない面々が騒ぐが……これは助かる。

「姫路さん。今、自己紹介をしている所なんだ。丁度良いから、名前、趣味、好きな食べ物、好きなタイプ、ついでにスリーサイズをどうぞ」

そう言つた瞬間クラス全体の視線が彼女に集まつた。

「えつ！？は、はい！あの、姫路瑞希と言います。趣味は料理をすること。好きな食べ物は苺のショートケーキ。好きなタイプは、その、優しく元気な人が……………。スリーサイズはきゅつて言えません！」

真っ赤な顔を両手で隠そうとしているが、耳まで赤くなっているた

め丸分かりである。クラスが異常なハイテンションになつているのは興奮状態になつてているからだろう。（端の方でミナがうな垂れているのは最後の言葉に絶望しているのだ）

『はいっ。質問です！』

「え？ あ、は、はいっ。なんですか？」

いきなりの質問に驚く姫路の反応が小動物を思わせながらテンションが上がって行く。

『なんでここにいるんですか？』

……もう、存在を忘れられているので静かに席に座る。

失礼な質問に聞こえるが彼女がここにいる理由を知らない者には疑問であるため、仕方が無いことだ。

成績は常に上位一桁の成績を収め続けている彼女は、その整った姿と共に誰もが知っているからだ。

『姫路さん、かわいそうだよね』

明久がボソリッとつぶやくように囁く。

文月学園の振り分け試験は途中退席は全ての教科を〇点にされる。彼女は試験中に高熱を出してしまい、退席をしてしまった。

……正確に言えばオレが保健室に連れて行つたのだが……。

『姫路さん、この教室で身体大丈夫かな？』

明久の心配通り、身体の弱い彼女には埃に隙間風、その他もうものは悪化の原因だろう

周囲がバカ合戦をしている中、彼女のことを見守る明久は……相変わらずと言うべきか？

『多少、明日からマシにするように手は打つが環境そのものを入れ替えないときついな』

『……環境そのものを入れ替える、ね……』

「で、ではっ、一年間よろしくお願ひしますっ！」

逃げるように自己紹介を打ち切り、空いていた明久と雄一の間に腰を降ろした。

「あ、緊張しましたあ～……」

安堵の息とともにちやぶ台に突っ伏す彼女に明久が声をかけようとしていた。

「あのさ、姫——」

「姫路」

しかし、反対側の雄一の声にかき消されて彼女は向こうを向いてしまった。

けど、明久。スポットライトを浴びて絶望に喘ぐ様な事をするな。後であいつの解体作業は手伝つてやるから。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それはボクも気になる」

体調の話になり、さすがに気にしていたのか回り込んで話に参加していった。

「よ、吉井君！？」

そんな明久に驚いた表情と赤く染まつて頬。ああ、また墮としたのか？

「姫路。明久がブサイクですまん」

「ユウ。お前が言つセリフじゃないし、フォローじゃなく罵倒だぞ、それ」

「そうです！目もパツチリしてると、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ……」

やはり墮ちていたか。

「そう言わると、確かにみてくれば悪くない顔をしているかもしないな。俺の知人にも明久に興味を持つていてる奴がいたような気もするし」

「え？ それは誰 - - 」

「そ、それって誰ですかっ！？」

明久を遮るように雄一に迫る姫路。遠くではミナも耳を傾けている。しかし、その行動の意は明久には届かない。届いたら色々楽になるんだが……。

「確か、久保 - - - 利光だつたかな」

性別、だな。

「……もう僕、お婿にいけない」
あー、明久が声を殺して涙河を作つてしまつてゐる。つてか婿入り
する気だつたのか？

「明久、雄二の情報は嘘だ。根本に間違があるからな」
「根本？」

「考えてみろ？久保つて確か学年、現次席だ。そんな頭の良い奴が
……」

「雄二」を指指して、

「こんなゴリラと知人である訳がないだろ？」「

「それもそうだね」

「誰がゴリラだ、コラ！――！」

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

先生が教卓を叩いて警告された。

「あ、すいませ――」

バキイツ　バラバラバラ……

教卓が崩れて木片になつてしまつた。腐つてたのか？

「え――替えを用意してきます。少し待つていてください」

足早に先生が教室を出て行く。改めて、現状に溜息が出てくる。
すると、明久が雄二を誘つて廊下へと出ていった。一体何を始める
気だ？

聞き耳だけでも立てに行こうと思つたが……

「あの――、ちょっと良いですか？」

姫路に呼び止められた。

「何？」

「その、あ、ありがとございました。保健室まで運んでください
て……」

「……その話か？別にいい、成り行き上だつただけだ」

「で、でも。そのせいであなたまで無得点扱いにされてしまいまし
たし……」

「点数なんてどうでもいい。それに明久と同じクラスになれた方が
よかつたから」

「去年が去年だけに知らない所で死にかけられたら困るし……」

「吉井君と親しいんですねか？」

「首を傾げながらそんな質問をしてきた。

「……あいつとは小学校からの付き合いでし、な」

「小学校、ですか？」

何やら考え込む表情になる姫路だが、一一もしかして……

「ねえ？誰だかわからない？もしかして……」

「えつ！？いや、あの、その……ごめんなさい、分かりません」

やつぱりか。そんなに変わったかな？

「ん~、小学校の頃転校してきて、なんて言えばいいだろ？。……
ドラ猫つてわかる？」

「ドラ猫ですか？」

「ああ、いい。解つてない反応だから。……となるとノラとか系は
知らないだろ？し……！二ヶは？」

「二ヶですか？それなら五年ぐらいの運動会で聞いた事が確か……

「そうそう、オリジナルシャツ作成の時。オレのコードネーム……
「でもそれは黒井さんだったと……黒井さん、ですか？」

「そうだが？」

「…………エエエエツ~~~~！……！？？」

「……叫ばれてしまつたが、そこまで変わったかな？」

一話目（後書き）

次回、【店】が登場します。しかし、更新は気まぐれなので気長に
お待ちください。

アドバイス、訂正、感想をいただけたら嬉しいです。

II. 関連用語 (語彙)

気がついたらコースというのが1000を越えていました。ありがとうござります。
……ちょっと暴走しましたが少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

ああ、今日はそういう事か……。

姫路とのやり取りをやっている内に先生が戻ってきて、いつの間にか明久達も席に座っていた。

明久にこつそり何をしていたか聞いても…

『まあ、すぐわかるよ』としか言わない。

そう言わればどうしようもないし、まだ自己紹介が終わっていいのでは引き下がった。後はまた淡々と自己紹介をしてこそ、ようやく終わりが見えてきた……。その時、

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

ユウが先生に呼ばれ席を立ち、教壇に向かうその姿は去年からよく見るふざけた雰囲気ではなく…、

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね?」

代表らしい貫禄を見せていくように見えるが、間違いない。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

奴がクラス全体を見るのは様々なことを計算し始めた顔であり、

「さて、皆に一つ聞きたい」

間を取つて、全員を自分に集中させる策略はかつての異名を彷彿させる。

注意が自分に集まつたのを感じ取つてから、視線をゆっくり動かし

…、

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れたちやぶ台

と環境の悪さの代表格へと誘導するは、手品師を思わせる。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい
が…不満はないか?」

『大ありじやああつ…………』

教室全体に魂の叫びをさせるはどこかの指導者…………、

「だろう?俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識
を抱いている」

『そうだそうだ!』

『いくら学費が安いからと言つて、この設備はあんまりだ!改善を
要求する!』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ?あまりに差が大きすぎる
!』

次々あがる、自業自得を無視した不満の声

『みんなの意見はもつともだ。そこで』

そんな同意の声を聞き、ニタリッと笑う表情は、獲物を見つけたケ
ダモノのものだが……、

『これは代表としての提案だが……FクラスはAクラスに『試
験召喚戦争』を仕掛けようと思う』

何かを見つめる眼は周囲すら巻き込む悪ガキのものであった。

（視線、吉井明久）

え～っと、どうも。吉井明久です。今、僕は先生が教室からいなく
なつてから、クラス代表の雄一を誘つて廊下に出てきました。
今ならホームルーム中だから人の気配はなく、安心して話をするこ

とができる。

「んで、話つて？」

「IJの教室についてなんだけど……酷いもんだと思わない？」

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

「雄一もそう思つよね？」

「もちろんだ」

「Aクラスの設備は見た？」

「ああ。凄かつたな。あんな教室見たことがない」

そりや そりや そりやうね。遅刻しかけで横田で見てただけだったけど、あのバカでかい教室の上に、壁を覆い隠すような大きさのプラズマディスプレー、さらにノートパソコン、個人用アコム、冷蔵庫、リクライニングシート等などエトセトラ。

え？ 横田にしては詳しそぎないかつて？…… まあ、ちょっと、ほんとにちよーーーとだけ足を止めて覗いていたけど…………。

ともかく！－AとFの格差は計り知れない。用とすっぴんぐらいだ

！－（注意、正しくは用とすっぴん、です）

「そこで提案。せつかく一年になつたんだし、試験戦争をやってみない？」

「戦争、だと？」

「うん。しかもAクラス相手に」

「……何が目的だ」

雄一が警戒するような目で見てくる。

……なんて言おう。流石に僕やこいつ、多数の男子は自業自得だと思つけど、リンや姫路さん達にはもう少し救いがあつてもいいと思つてという理由は恥ずかしいし……、

「……学校つて社会の縮図だろ？ それなのに、こんな差別を受けるのはおかしいじゃないか！？ でも、今の僕達が言つてもやつかみにしか聞こえない。だから、一番上に立つて、それから権利の主張を

－－

「つまり、姫路や鈴達のためになんとかしてやりたい」と

「人がせっかく考えた言い訳を流すな！！」

「……力マをかけたらすぐに引っ掛けた」

しまった！ハメられた！

警戒を解いたが、代わりにニタニタとこちらを見て笑っていた。

「……ああそうだよ……リンに言われて思い浮かんだんだ。悪い
か！？／＼／＼

火が出るほど顔が熱いが、知ったこっちゃない。代表である雄一を動かさないとこれはできないんだから、もう正直に言つてやるわ。

「まったく、お前は相変わらずのバカだな」

「うるさい！で、どうなの？ Aは無理でもB……はきついからC……イヤ、駄目ならD……百歩譲つてEでもいいからやらない？」

「オイオイ、どんどん下がつていってるぞ？」

だつて、あのFクラスでのやり取りを聞いていれば、どれだけバカの集まりかわかるつての。

「安心しろ。どのみち、戦争はやる気だつた。しかも、Aクラス相手にな」

「えつ？なんですか？」

「……世の中、学力だけが全てじゃないって証明したくてな」

「……何をしたいのかはよくわからないけど、何かを思い詰めるような雄一がいた。

「……それに、いい作戦も思いついたしな。先生が戻ってきたな。俺らも戻るぞ」

「あ、うん」

雄一に言われて教室に戻る。……けど、何だろう。何かいやーな力が感じるんだけど。

『バカか？Aクラス相手に勝てるわけねえ！』

『これ以上、酷い設備はごめんだ！』

『姫路さんがいれば、何もいらない！』

教室内が喧々囂々になってしまったが無理もない。

Fの基本戦闘力になるテストの平均は、高く見ても900。対し、Aの平均は低く見ても2000。と、二、三人で囮んでも返り討ち。相手によつては五人相手でも返り討ちにできる相手なのだから。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

『何をバカなことを』

『一体、なんの根拠があつてそんな事を言つんだ！！』

『姫路さん、大好きです』

明らかに話に関係ない輩がいるが、それは無視しながら不満が出てくるのを待ち、口を開いた。

「……いいだろう。ならば、根拠を話してやる。おい、康太。姫路のスカートを覗いてないで前にこい」

「……！（ブンブンブン）」

「は、はわ！！」

必至に顔と手を横に振つて、否定の態度を取つてゐるが……頬の豊の跡もだが鼻血を隠せてないし。

「土屋康太。こいつがあの有名なムツツリーーーだ

「……！（ブンブンブンブン！ーー）」

『ムツツリーーーだと……？』

『バカな、ヤツがそうだと「うのか……？』

『だが見ろ。あそこまで明らかに覗きの証拠を未だに隠そつとしているぞ……』

『ああ。ムツツリーの名に恥じない姿だ……』

その名 자체が恥だろ？』

『？？？』

姫路はその意味が解つてないみたいだが、わざわざ教えるものでもない。

「姫路のことは説明する必要も無いだろう。既だつてその力は良く知つてゐるはずだ」

「えつ？ わ、私ですか」

「ああ。ウチの主戦力だ期待しているこのクラスどころか、学年でも五指に入る実力は、戦争では無敵の札となるだろう。

『そうだ。俺達には姫路さんがないんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けはとうない』

『彼女だけ、な。

『ああ。彼女さえいれば何もいらない』

『誰か知らないけど、明らかに脈はひだし、前の明久がもう墮としている、諦めるのをお勧めする。

『木下秀吉だつている』

『おお……！』

『ああ。アイツは確か、木下優子の……』

秀吉は学力ではFだが、演劇部のホープとして有名である。

『当然俺も全力を尽くす』

『確かになんだがやつてくれそうな奴だ』

『坂本つて、小学校の頃は神童とか呼ばれていなかつたか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが一人もいるのか！』

いや、Aはないだろ。去年、授業すらまともに聞いてすらいなかつたし。

『まあ、テンションを潰すから言わないでおくけど。

『さりに、気づいている者もいるだろ。黒井小鈴が何者かに……』

ほぼ暴走を始めてる面々を客観視していたら名を上げられてしまつた。

『そつ。奴は、なんでも屋・【黒い子、鈴の卓球便】の店主だ！』

『ちよつと待てえ！誰だ、その名前をつけたのは！？』

なんか知らんが変ことに。品物の依頼なんかにすぐ対応（返球）、つて意味で卓球便は名乗っているが頭についてるのはなんだ？しかも、某クロネコのリズムみたく語呂が良いし。

『やはり、奴がそうなのか』

『鉄人すら脅している黒い子がいると聞いたが……』

『色んな情報も集めて、裏から学園を操つてると俺は聞いたが、それもさらに待て。西さんはしつかりと事前にチェックを通してあらから何も言わないようになつただけだし、情報集めは品物の流行予想と師匠の頼みだけだ！！』

『黒い子、鈴がついているウチが負けると思うつか？』

『勝手にオレにそんな役を付けんな！！否定させろー。』

しかし、誰も話なんぞ聞いてくれず、暴走が止まらない。

『それに、吉井明久だつている』

……シン——

あつ、止まつた。

「ちょっと雄二ーー。どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさー。全くそんな必要はないよねー。」

『誰だよ、吉井明久つて』

『聞いた事ないぞ』

あーれ？忘れてる？樂になれると思つた、つて身体に刻まないと駄目かな？（黒）

『そうか。知らないようなら教えてやる。ここつの肩書きは《観察処分者》だ』

ああ、ユウ。遺言はそれでいいのね。

『よくも言つたな、雄二ーー。皆、チガウんだ。それには深い理由が……つて、リン！？どこからそんなでかい、先が斧みたいな槍を取り出したのー？』

『ん？明久。これは戦斧つて言つて、そこのドリラを開きにするも

のだ

特殊な収納法で仕舞つてあつた相棒を取り出し、ユウ日掛けで振り下ろす体勢になる。

「あ、明久！助ける！！試召戦争が出来なくなるぞーー！」

ああ、その時は代わりの代表を選抜する。だから……永久に寝てな。

「……お休み、ユウーー」

「リン、ごめん……」

別れを言おうと思ったら明久が飛び掛かつてくる。しかし、後は振り下ろすだけだから止められや……、（ストンツ）えつ？

「ほーら、リン。落ち着いて」

「ちょ……あき、ひさ……それは……ナシ……」

膝から崩れ落ちるように力が抜け、何も出来なくなる。

明久が何をしてきたかというと……頭を撫でてるだけ。何故か知らないが明久に撫でられると力が抜けてしまう。

「……ヒサ……ヤメ……。ユウを……ヤレな……い……」

「雄二のはいつもの事だからいいよ。じゃないと……」

「……！」

明久が次にやつたのは、空いていたもう片方の手をあごに持つてきて、喉の辺りをくすぐり、合わせて猫のようなあやし方であるが、力がどんどん抜けていく……ヤメテ！！周囲がこっち見てるから……

『…………なんじやこりや』

それは私が言いたいわあ……

声にならない叫びの代わりに、小鈴の首からリンツと鈴の音が響いた。

二話目（後書き）

ははは。暴走です。

男娘感オトメを出したかつたんですか……。おまけに【店】が気分、さらりとだけに……。

感想、訂正、アドバイスをいただけたら嬉しいです。

四話題（前書き）

更新しました。

…なんか謎が増えてしました。

皆さんのが楽しんでいただけたら幸いです。

すいません。今は恥ずかしくて何もしたくないです。

「あ～、口が少しきもがく～、俺達には一匹の勞れる黒素子～、俺

備運の力の説明として おおは口々に
皆、二の競馬は大いに不満である。一

当然了！！

「ならば全員ペンを執れ! 出陣の準備だ!」

「俺達は必要なのはセイセイ台ではない！」アグニスのシステムデータ

- 1 -

クラマノベニ

クラスのハイテンションに圧されて、小さく姫路も拳を作つてのつていた。

「……下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思つて行つてみろ」

一本
本当に?
」

「もちろんだ。俺を誰だと思ってる！」

そんな堂々とした言葉を言う雄一。横目で明久を見れば、その言葉を信じようか考え込んでいるようだ。

しかし、ユウが誰かと言えば呼吸するのと同等に嘘と騙しができる外道である。つまり、使者が死者に逝くようなものだ。

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

「…わかつたよ。それなら使者は僕がやるよ」

「…また、騙されてる。」

「ああ、頼んだぞ」

クラスから歓声と拍手をされながら明久はDクラスへと向かった。ヤレヤレ。いい加減、学習すればいいのに。

まあ、最初は学習と前回の羞恥（／＼）の仕返しに見逃すけど……「という訳で、アイツはバカだから危険になつたらアイツを盾に逃げるようだ。さて、次にだが——ギャベ！！！」

『さ、坂本！！？』

『敵襲だ！ 狙撃されたぞ！…』

『見ろ！ 坂本の両目が…五円玉になつてる…』

『一体、誰が…』

『アレ？ そういえば鈴は？』

『んむつ？ いないぞ？』

『さつきまでそこにいましたよね？』

『…鈴なら明久を追つてつた』

…コウ、死んどけ。

ユウを狙撃した後、廊下に出て、新校舎側にあるDクラスへ向かうため渡り廊下に向かう。流石にホームルームも終わり始めたので何人か生徒と擦れ違つた。

「…あ、スズ！ ちょっと、スズ！！！」

もう少しで渡り廊下に足を踏み入れるところで後ろから声がかけられた。

「…ヒロミ？」

「おはようー元気だつた？」

声をかけてきたのは少し日焼けになつた健康的な肌。ヘアバンドをつけた少女、中林宏美。テニス部の中心的存在であり、【店】を担

う店員の一人をやつてもらつてゐる。

「ハイ。いつもの依頼、部活とかのもまとめてあるから」

- ハッ?
「

「…あれ、品表を回収しに来たんじゃないの？ そういえば、あんたはクラス二二？ 私はEだったけど代表よ？ やっぱり？ 意外にBとか？」

あ、旧校舎にしては日本一の品表といふのか。とよつやく納得がいった。

いや オレは「たこたこ」

さつさと新校舎に行きたかつたので、強引に

さへと新橋寄りに歩きながら、たのて 強引に話を纏め、て再び渡り廊下に足を踏み入れようとしたが、向こうから叫び声。…しかも、

知っている声の叫びが聞こえてきた

三人程の男女が奥へかけてきていた。

「アレ? あれってアンタがいつも言つてた吉井じゃ……つて、スズ

「目が据わってるわよ？」

目が据わってる?そりやそうだ。こつちに走つてきている明久の制服がちぎれていたり、刃物に切られたようになつてたり、全身がボロボロにされているのだから……。

「スズ? 背中に手を入れて… 何、その手の平サイズの筒? (カシャガチャカシャン) えつ、伸びた! ? 武器! ? 槍よね、それ! ?」惜しい。前回も出したけど槍じゃなくて戦斧。今の相棒『虎咆』。小さく、折りたたみ可能な代わりに、軽くて破壊力は低いけど…。『待ちやがれ、Fクラスのくずが! !』

『面倒』ことを持つときはがつてーーー』

「ハアツハアツ
リソ?」

3

渡り廊下から旧校舎側。つまり、後一步で旧校舎であり、虎砲を持つオレの間合いに入らないギリギリ。

そこで戦斧の切つ先を鼻先につけられる事でよつやくDクラスの面々が立ち止まつた。……後一步だつたのに。

「どうも、Dクラスの皆さん。悪いことは言わないから一歩でも旧校舎の境界を越えないことをお勧めしとく」、

半ば、そこが我慢の限界ラインだから

『な、なんだよお前！俺らはそこのFクラスのカス代表に用があるんだ！！』

『そりだ！下位勢力の分際で、身の程を教えてやるんで、邪魔するな！』

『ソイツをボコボコにしないと気がすまないんだよー！』

『邪魔するならあなたも容赦しないわよ！？』

カス代表。分際。身の程。ボコボコ。容赦しない？……本当に後一步踏み込んでくれないかな……。

「あ～、そこのDクラスの人達。今すぐ引いたほうが良いわよ？」

『ああん？誰だ？』

『あれ、中林さん？』

「……あんたら、これが誰か知つてケンカ売つてる？」

『誰つて……なんか、青筋うかんでいないか、ソイツ？』

『……浮かんでるな、白髪の中にぱつちりと……白髪？』

『なあ、あれつてまさか……』

「そつ。玄関先でよく起こる人山を作るく白光の黒子』よ？』

あ～、また妙なネームが付けられているんだ。どうでもいいけど。

「改めまして。カスのFクラス、黒子こと黒井小鈴と言います。ちなみに趣味で卓球便も経営中ですが……」

『なつ！？Fクラス！？』

『おまけに卓球便つて何でも屋の！？』

あ～、それだけで店の事をわかつてもうえるようになつたのは嬉しいけど……。

「しばらぐクラスは休業をせてもらこますか」

『『『『ナーライイーーーーー』』』

うるさいな。やるつと思えば骨の2桁ぐらこは逝けるのこやつちの
方が好みかな?

「リン。ストップ」

虎咆に力を入れようかと思つた瞬間に息がよつやく整つた明久がそ
う言つてきた。

「僕なら大丈夫だから。ホラ、ね? 戻る?..」

「……ハアつ、わかつたよ」

せつきまで頭の中が真つ黒になつていたのが一気に冷めて落ち着いて
しまつた。

「それじゃ、今日の午後から開戦、といつことで」

「……ついでにそつちのタマちゃんにしばらぐ販売は休みつて伝言、
よろしく」

立ち廻くじでいる面々は無視し、明久と供にTクラスに戻ること
した。

「雄ーーーーー何が騙すような真似はしないだーーーーの『リラ野のうー
ーー雄ーー?パンダ目になつてもキモいだけだよ?』」

「氣色悪いゴリラとメガネザルの合成獣にしか見えないな」

Fクラスに戻つてきて最初に見たのは「王立ちでこちらを睨んでい
る坂本代表だつた。……目が青タンでパンダになつていたが。

「……言いたいことはそれだけか!! テメエのおかげだらうが!!
……」

そう言つてオレに指指しをしてきたが……ああそういえば、

「五円玉一枚、返して」

「言つ」とはそれだけか!! 勘弁ならねえ。女とはもう思わねえ

!」

そう言つて拳を鳴らしながらこちらに向かつてくる。田玉をぶつ飛ばされなかつただけいいと思えよ。

「黒髪さんに頼まれてたく雄一くん、人形。等身大への発注でもしようかな——」

「よーし、今からミーティングを行つぞ」

分かればいい。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

「吉井、本当に大丈夫？」

いつの間にか姫路とミナが明久を心配していたが、これといったケガはないはずだ。

「鈴、主も大丈夫だつたか？」

「ん？ ああ、虎咆を出して脅したら止まつてくれたからな。……イヤ、一人一人戦闘不能にした方がよかつたか？」

「よくない」

「……過激過ぎ」

そこまで過激かな？ 正当防衛ぐらいになると思つが。…… そういうば、

「忘れてた。ハイ、ムツチー。契約違反のカメラの半分

「……！」

すっかり忘れてた。カバンに入れていた、朝回収したカメラの半分を手渡した。

ムツチーはカメラを手渡されると膝から崩れ落ちていつた。

「去年も言つたよね？ 女子更衣室等を見ることが可能なセットをされたカメラ、ローアングルを撮る目的と思われる位置のカメラは回収して、半分戴くつて。あつ！ ムツチー以外のもあつたからそれ対策は頼むな」

「……（コクツ）」

「ああつ！ もうダメ！ 死にそう！」

ムツチーに依頼をしていたら、また明久が暴走してゐる。大方、ミナ

が照れ隠しに『なら、殴つても大丈夫ね』とか言つたんだろう。
「明久、落ち着け。それと、ユウにミーティングは行けないって伝
えといで」

「えつ、なんで?」

「ミセの方で用事があるから。それじゃよろしく」

「あ、うん」

明久にそう言つて教室を出ていく。

しかし、用はミセと言つても卓球便ではない。
手元に視線を移し、携帯の画面を見る。

「『旧校舎の2階の空き教室で影をよく見かける』か。噂の真実が
見間違いか大人しい（・・・）といいけど……無理だらうな」
なにせ、此処には召喚獣システム（・・・）があるのでから。
師匠に任せられたのに思わず溜息が出る。

しかし、誰かが小鈴の顔を見る事ができたなら、その唇の端が上が
つているのを見ただろう……。

四話目（後書き）

ようやく次回から戦争に入れそうです。
中々話のテンポが一定しません……。
訂正、アドバイス、感想をいただけたら嬉しいです。

五話目（前書き）

更新です。

なんか明久がレベルアップ？「イープダウン？」をさせてしまいましたが…まあいいでしょう。

楽しんでいただけたら幸いです。

《バカテスト、国語》

【第一問】

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『（2）悪いことがあつた上に更に悪いことが起きるたとえ』

姫路瑞希の答え

- 『（1）弘法も筆の誤り』
- 『（2）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴つたり』や『弱り田に祟り田』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『（1）弘法の川流れ』
- 『（2）見つかり没収（涙）』

教師のコメント

シユールな光景ですね。しかし、（2）はどうことでしょうか。

黒井小鈴の答え

- 『（1）河童のタケルが足つって溺れて流される』
- 『（2）泣いてるモモを蜂が刺す』

教師の「メント

場面は合っていますが、ことわざを書いてください。そして、タケルとモモって誰ですか。

吉井明久の答え

- 『（1）リンの勘定計算ミス』
- 『（2）泣きつ面蹴つたり』

教師の「メント

黒井さんも人間ですので失敗はします。そして、君は鬼ですか。

「それでは、回復試験を始めます。準備はよろしいですか？」

「はい」

今オレは姫路と共に高橋先生担当の下、回復試験を受けている。なぜなら、振り分け試験を途中退席した者は、途中受けた教科すら全て零点にされる。……時間返せって言いたいよ。

つまり、今のオレらは召喚した瞬間に戦死となってしまい、西さんによる【戦死者、補習フルコースツア】に強制連行されてしまつ。経験者曰く、『……あれは補習じゃなく、洗脳だ。教育じゃなく、調教……アアアアアアアツ……ヤメテぐれ……オレ、ハーベンゲンダ、トランハナレナイ……オレはトランじゃないんだ……』と暴れ出したとか。……ナニコレ。西さん、何をやつてんのぞ。かなり怖いんですけど。

「黒井さん。試験に集中してください」

「失礼」

今は負けた事を考える時じゃなかつたな。田の前の問題をさつあと解かないと。一問の正解が召喚獣のHPやら攻撃力やら……どちらかと言えばレベルに近い物になるんだし。

しかし、そう考えると振り分け試験が終わってすぐのこの試験は、全体的に得点が上なりDクラスが勝つに違いないって数字上は思うだろうな。

けど、これは学力だけの勝負じゃなく、学力を利用した戦争だから、十分勝つ手段に策略はある。

……明久なら気づくだろ。

〈DクラスVS Fクラス、前線〉

「む。総員、戦死する前に退くのじゃ！ 防御に集中するのじゃ！」

『塚本！ Fクラスの前線、撤退していくぞ！』

『そりやそーだ。Fクラスのバカどもに俺らが負ける訳がねえ！』

『おらあ！！ Fクラス一人撃破！！』

新校舎側の渡り廊下、入口で戦争の前線が行われていた。しかし、点数の差が戦線に見え始めていた。

「さあ来い！ この負け犬が！」

『て、鉄人！？ 嫌だ！ 補習室は嫌なんだつ！』

「黙れ！ 捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！ 終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷり指導してやるからな」

『た、頼む！ 見逃してくれ！ あんな拷問耐え切れる気がしない！』

「拷問？ そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは一宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやるう」

『お、鬼だ！ 誰か、助けっ……イヤアア……（バタン、ガチャ）』

まるで死臭を嗅ぎ付けたハゲ鷺のことくに鉄人が表れ、戦死になつた男子生徒を片手で持ち上げ、補習室へと連行した。

『お、おつかねえ……』

『だが見る。Fクラスの奴ら怖じけづいたみたいに引いてくぜ？』

確かにFクラスの面々はどんどんと退いていき、後ろの方は旧校舎側に着きそ�だつた。……まるで誘い込むように。

『さあ、Fクラスをさつさと潰すぞ！』

『！待て！一人で突つ込み過ぎだ！』

先程Fクラスの一人を補習室送りにした生徒がさらに、と退いていくFクラスを追つていつた。

『塚本？何焦つてんだ。相手は格下だよ？多少先行しても簡単にやられや……』

『ぎやあああああ！……』

『！！？』

『戦死者は補習！！』

再び現れた鉄人が戦死者……先程、独断先行をした生徒を担ぎ出していた。

『なつ！？山本！！』

『一体、何があつたんだ！？』

『見ろ！？Fクラスが何かやつてるぞ！！』

旧校舎の入口近くを見てみれば人数が増えていた。恐らく、増援と合流したのだろう。

しかし、それだけでは戦死させられた理由がわからない。

『『『『試獣召喚^{サモン}』』』』』

するとFクラスがまだこちらに距離があるのに召喚獣をだしてきつた。

『第一陣、放てえ！！』

Fクラスからの号令が渡り廊下に響き、それと共に、召喚獣達が自分の武器をこちらの召喚獣目掛けて投げてきた。

『なつ！？全員避けろ！！』

それぞれ飛来物を避けようとした。しかし……

『うわつ！崎本、邪魔だ！！』

『こつちも当たるだろうが！！』

『キャッ！！』

互いの召喚がぶつかつたり、壁に邪魔されたりと上手くかわすこと

ができない。

そもそもどうだろ？ まだ、召喚獣の扱いに慣れていない上に、渡り廊下という狭い空間で混雑しているのだから。

しかし、投げられた武器は大工用ハンマー やバット、鉄パイプにのこぎりなどだつたが、やはり点差があるのか戦死まではいかなかつた。

「第二陣、ようい！」

『奴ら召喚獣を引っ込めたぞ』

『また来るぞ！』

『——なら、先に攻撃するだけだ！』

そう言えば数人がFクラスに突撃していった。

『島田さん！ 須川くん！』

「OK。島田美波、受けます！ サモン！」

「同じく、須川亮参加します！ サモン！」

『Fクラス 島田美波 数学 173点

VS

Dクラス 渡

辺有志 113点』

『——Bクラス並だと？！？』

『数学は得意教科なの』

『だが一、三人がかりでいけば……』

『させつかよ！？』

『Fクラス 須川亮 83点』

『Fクラス、近藤吉宗も行きます！？』

『武藤啓太も参戦します！？』

『同じく、君島博もです！？』

『Fクラス 近藤吉宗 51点

Fクラス 武藤啓太 63点

「武藤くんは島田さんの援護！バットで敵の手と武器の根元だけを狙つて！須川くん達は三人がかりで！…武器や体勢を崩させるのを重点に！！」

『『『『「了解！」』』』』

点数だけを見ればDクラスが勝つだろ？が…。だが、戦争は点数だけなく、人数も重要なのだ。

攻撃をしようにも体勢を崩され、そこを袋叩きにされたり、武器を狙われ、攻撃自体が出来ないで戦死するものもいた。

「皆離れて！第三陣、放てえ！！」

その間に再召喚をした面々の投擲が始められた。Fクラスはすぐに回避行動に出れたが、体勢を崩されているDクラスの召喚獣は無理だった。

Dクラス 野村誠 0点

Dクラス 佐々木正治 0点

Dクラス 樋口 宗太 7点

「戦死者は補習う！…！」

『『ギヤアア！…』』

『た、助けてくれ、塚本！…戦死しちまつ…』

『塚本！…』

『くそおー！全員、次が来る前に突撃…』

『ウワアア！…階段からもFクラスが来たぞ！…』

『Fクラス 鈴木翔 数学 52点

Fクラス 瀬戸雄大 数学 49点』

『塚本！…挟まれたぞ！…？』

『どうする……？』

『クツ…。全員、撤退だ！！体勢を立て直す…！身を守る』ことだけを考え後ろへ進め…！』

『樋口は…？』

『無理だ、あきらめろ…！』

『クソッ…！樋口、すまない！』

個人的な点差はあるため、身を引くのは可能だつた。だが、試験召喚戦争ルールによつて戦闘を挑まれたのは敵前逃亡のため幾人かは逃げれなかつた。

『見る！Dクラスが引いてつた』

「どうする、吉井？」

「深追いは危ないよ。相手は格上だし、時間稼ぎはできるから戦力の再確認かな？」

『吉井隊長。こちらの戦死は三名。補給が必要な重症者は木下隊長も含み六名。対し、あちらは戦死、八名。重症者、五名とのことです』

「了解。んじゃ秀吉、回復試験を受けてきて？」

「うむ。…しかし、主の策が当たつたの。どうしたのじゃ？」

「ほんと、上相手にここまで的確に…。あんた、頭打つた？」

「少しば褒めてくれないの！？…ゲームの応用だよ。相手は嘗めてたから深追いしてきたのを利用しただけだよ…」

「「ゲーム？」」

「うん。確かに、WBCって名前のネットゲームだつたかな。それにあつたのを利用したの」

そう答えたならほぼ全員がこちらを見ていた。

「…どうしたの？」

『吉井…WBCって《ワイルド・バグ・サイバーズ》か？』

「あ、それそれ」

『ワイルド・バグ・サイバーズ。WBC。ネットゲームでいわゆる《終わらない》ゲーム。レベルが

なく、鍛えれば鍛えるほど強いキャラにすることができる。しかし、

パワーだけを鍛えても途中で上がりにくくなり、身体の耐久度を上げると再び上がるなどバランスにも気をつけないといけない。といったように育成もできる。RPGを楽しむもよし、コーナーやノンプレイヤーの仲間を集めるのもよし。そして、偶然できたバグが作り上げたとも言われるほど多彩な利用法があるゲームとして有名である。

『へえ～吉井もやつてんのか？』
『俺、この間レイカを仲間にできただぜ！』
『でも次の日に離れていったんだろ？』
『俺はギラザウルスを倒したぜ？』
『ステータスアップのために金魚のふんしたんだっけ？』
『んで、吉井のユーザー名は何なんだ？』
『文明ふみあきだつたかな？』
『　　何イツ！！！？』『　　』
明久の台詞には一同が反応した。
「ど、どうしたのさ？」
『お前があの『文明』なのか！？』
『Ｚ・Ｉバグキャラ、孫５９と【ロングロングファイト】で唯一勝つた、伝説持ちの！？』
ロングロングファイトとはあらかじめ決まった戦力で何処まで闘い続けられるか。何処まで領地を広げられるかという国物語を行う物である。
ちなみに勝つたというのは、何故かノンプレイヤーキャラクターの仲間（女の子）が無駄な戦闘はしつかり避けて、戦う時は無双の働きをしてくれて……気がついたら世界征服して、天下大平を達成してたりする。半ば明久はそれについていつただけなのだが……
『すげえつ～！そんな奴がいればロクラスなんて屁でもねえ～！』
『吉井隊長！あんたに命預けるぜ～！』
『ウオオオオ～！燃えてきたあ～！』
上がりまくったテンションは下げるべきではないだろう、うん。

「皆、今は奇襲が上手くいっただけ。次は相手も本気で力を入れてくる。本番はこれからだよ」

『『『『オウツ！－！』』』

「僕らの役目は時間稼ぎ。そのために前線を維持し続ける…誰が犠牲になつても、できるだけ長く、だ」

『『『』』』

「勝つために姫路さんが来るまで耐え抜く！男の意地を見せれるか！？」

『『『』』』

「倒す事は二の次でいい！敵を此処で足踏みさせるのが僕らだ！！！」

男の華道、咲かせてみせろ！！！」

『『『』』』

『Dクラス！攻めてきました！！』

『全員戦闘準備！必ず勝つぞ！！』

『『『』』』

『ツシヤアアアアア－！サモン－！－！－！』

そして再び戦線がぶつかり合つ！

「－－吉井？私は女なんだけど？」

「いや、あれは場の流れつてだけで、別に島田さんが男勝りということでは……島田さん、関節はそつちには曲がらな……！？」

「誰が男顔負けですつて……？」

「そこまで言つてナイイイイ－！－！－！－！」

――なんか明久が墓穴を掘つた氣がするな。少し早く行こう。勝負と遊びは全力で、つてね……。

チリンッ

五話目（後書き）

明久のゲーム率が深まりました。そして、ゲームでも墮としているのか！？
アドバイス、訂正、感想をいただけたら嬉しいです。

六話目（前書き）

ちょっとしたエフをやってみたかったのですが、……島田美波ファンの方、すみません。

こんなタイミングですが更新しました。
楽しんでいただけたら幸いです。

「先生、すみません。次のをお願いします」

「黒井さん。よろしいんですか?」

「はい。構いません」

なんか嫌なカンが騒いでる。急がないと……。

『隊長! 長谷川先生が連れてかれ、教科が五十嵐、布施先生の化学に変わりました!』

『しまつた! 化学70以上は前へ! 他は援護に回つて! 必ず三人以上で挑んで! !』

「吉井。化学には自信がないの。60点台の常連なのよ」

「…なら、今来た学年主任のところへ。化学のフィールドには入らないように注意して」

「了解!」

前線の戦闘はすでに混戦となつていた。

敵が戦力の数を増やしてきたため、点差が徐々にこちらを押してきていた。今はなんとか相手を狭い入口近くで足止めさせ、多数VS 少数の状態で維持はできているがいざればその包囲も破られるだろう。

「お姉さまあー!」

「! 美春! !」

戦場に響くお姉様の声に思わず反応して見てみれば、島田さんがD クラスの女子に捕まっていた。化学のフィールドを抜け出す前に捕まってしまったようだ。

「フツフツフツ、お姉さまあ～逃がしませんよお～

「くつ、美春～やるしかないつてことね……～」

「――お姉さまに捨てられて（・・・・・）以来、美春はこの日を

一日千秋の想いで待つていました……」

よく通るその声に戦場の音が止まつた。

「ちよ、ちよつと！ いい加減ウチのことは諦めてよ～」

「…島田さん、お姉様つて――」

「嫌です！ お姉様はいつまでも美春のお姉様なんです！」

「来ないで！ ウチは普通に男が好きなの！」

「嘘です！ お姉さまは美春のことを愛しているはずです！」

「このわからずや～」

…なんだか、島田さんが遠い。

周囲も二人から離れて…とこづより、引いていっていた。

「行きます、お姉さま～」

「はああつ！」

「やあああつ！」

二人の気合いと共に召喚獣がぶつかり合ひ。

島田さんの召喚獣がサーベルを使って切り掛かれば相手の召喚獣が両刃の剣で受け止める。そして鎧ぜり合い、力比べになつたが、

『トクラス 島田美波 化学 53点 VS ロクラス 清水美春

94点』

召喚獣の頭上に表示された二人の戦闘力が島田さんの不利を示していた。

しかし、島田さん、サバ読んだな。

「島田さん…向こうの方が点数が高い…真正面は無理だ…受け流して！」

「そんなこと言わなくともわかつてゐけど、そんな細かい動作はできないのよ～！」

直後、均衡が崩れ、島田さんの呑喰獸が弾き返された。体勢を崩している所を相手の清水さんが追撃していく。

「！」までですっ！」

「くうつ…まだ！」

体勢を崩しながらもサーベルを振るい、相手を攻撃する、がしかし…「無駄ですわ！」

それは相手の腕を掠めただけで、そのまま押し倒された。

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

刀を喉元に突き付けられる島田さんの呑喰獸。さすがに首や心臓といつた急所をやられたら即死——補習室行きとなる。

「い、嫌あつ！補習室は嫌あつ！」

「補習室？…フフッ」

しかし、どうしたのか。相手はトドメをやれずに島田さんの腕を取ると階段の方へと向かっていくようだった。

「…フフッ。お姉さま、この時間なら保健室のベッドは空いていますからね？ハフウ／＼！」

色っぽい溜息と危険な台詞。高揚して顔を朱く染める清水さんは対照的に島田さんの顔から血の気が引き、青くなつていく。

「よ、吉井、早くフォローを！なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの…」

『明久が助けを求められた。』

選択肢、ようすをみる

じゅもん

じうぐ

にげる

『明久はよつすをみた』

シミズがじゅもんをとなえた

「……クロシマスクヨ……」

『明久のゅうきが20下がった』

『Fクラスの一回が田を逸らした』

『Dクラスの生徒が見なかつたことにした』

『シミズからヒカリがきえ、ヤミにおおわれた』

「…島田さん、君のことは忘れない！」

「よしいいいい！」

つてのは嘘で、恐いけど島田さんはFクラス（ウチ）から見れば上方。敵はまだ召喚獣を出したまま。油断した隙になんとか…

「ジャマモノノケハイガシマス！…」

「嘘つ！？」

野生（×）恋する乙女のカンがこけらの思惑に気づいたようだ。

「くつ、サモン…！」

『Fクラス 吉井明久 化学 38点 VS Dクラス 清水美春
41点』

清水さんが先の戦闘で消耗していたおかげでなんとかなんとか戦えそうだ。……しかし、なんで僕の召喚獣は特攻服に木刀なんだ？
「ヤハリ、オネエサマトミハルノジャマヲスルキテシタネ！…」
「…つて、今考えることじやなかつた！」

ヤミに覆われた（なんで！？）清水の召喚獣が急接近してくる。点数以上のスピードで来るが、なんとかかわせた。

「…ジャマモノハコロス、ココロスコロロコスコロスコロス！…」

「ちょっと待つて！なんかいけないスイッチ入つてない！？バーサイカーモード！？」

清水さんがこの世ではないものになりつつある。しかも、周囲の空間がヤミで歪んできている！？

「…吉井」

「…島田さん！？よかつたさん！お願い、てつだ…つて…」
背後からかけられた声の主、島田に助けを求める…が、

「……ウチヲミステタワネ？」

島田さんがヤミに覆われていた。

「シニナサイ、ヨシイアキヒサ！」

「クタバリナサイ、コノブタヤロウ！」

『島田さんがてきになつた』

「ちょっと…？誰か、助けてください…！」

『明久はたすけをよんだ』

『今だ！前線を突破しろ！』

『吉井隊長がバーサーカーの盾になつてくれている。隊長の死を無
駄にするな…！』

『Dクラスは見なかつたことにした』
『Fクラスは明久をきりすてた』

「ちょっとおお…！」

「シネエエエエ…！」

「ケケケケケケケケ…！」

「しまつ…！」

ガキンッ…！

「……ギリギリ間に合つた」

「リン…！」

『小鈴がたすけにきた』

……カンが大当たり。急いで来てみたら明久が危険な事になつてい
たから割り込んだけど……しつかりツかれてるな。

「……明久。状況を教えて」

「えっと、島田さんと清水さんが保健室でキケンな事になりそうで、敵を騙すなら味方すら、つて思つたら攻撃されて、怒つた二人がや三になつてこんなことに……」

一解 球解じか

今のでねがうた！！？

長年の間柄を甘く見るな。それに、清水とは面識がある。大方、口いことに持ち込もうとしたのを邪魔されたのと、それを見殺しにされたり思つて攻撃してきて、ああなつたつて所だな。

五
ナニヤリ 田久 三つの刀を拂ひて さり
かんくわざるか

「頼むよ！絶対！」

はいはい、遊びと勝負は、金力で楽しむぞ。

フクラス	吉井明久	化学	38点
トクラス	黒井小鈴	化学	84点
VS			
ドクラス			

点

エカルス 鶴田美波(?) 8点

「うーん、どうも、思ひもよらぬ、何うかね？」

紙が無駄だか、あつあつがいいが、

テムだと無駄そのものだし、コンピュータで問題を出せばいいのに。

「やり合えなくはない」「

「……バトルジャンキー」

否定はしない

そしてとうとう一人が襲い掛かってきた…… 召喚者自身も含め。

「ええ！？」

「ほつ！」

驚く明久を庇うように前に出て、虎咆を取り出し二人の突撃を食い止める。

「それでいて召喚獣も動かしてるんだから、驚くよ」

清水の方は大振りながらも確実にこちらの召喚獣を攻撃してくる。ミナの方は明久が羽交い締めにしているがジタバタと抵抗をしている。

……しかし、オレの召喚獣はなんであんな装備なんだ？ 肩丸出し。へそ丸出し。胸のビキーは一応鎧？ 足元は布で隠せてはいるが切れ目から左足がさらけ出しているし……。武器は槍のように長い戦斧を右手に握り、左手には鉄扇が開かれている。どっちかで良かつたんじやないか？ ……どう見てもヘンなのになんか、その、懐かしいような、見覚えがあるような？

「まあ、考へても仕方が無い事だな」

二人を突き飛ばして距離を取る。ちょっとばかり血が騒いできたようだ。

『『『『あいつ、女だつたのか！？』』』』

……もう突っ込まん。ってかFクラスからも聞こえたぞ、おい！

「……ネエ、ズズ」

「なんだ、正気に戻つたか、ミナ？」

まあ、それはさすがに無いだろうが。

「……ナンデアンタノ召喚獣二ムネガアルノ？」

「……ハイ？」

「ナンデムネガアルノ？ アンタ、ウチノテキ、テキキテテキ」

……まづい、血が頭にきて……キテしまいそうだ。

「……落ち着け、ミナ。胸なんて千差万別あつて、それぞれに魅力があるもんだって師匠が言つて……」

「アナタモオネエサマノペつたんヲネラツテイルノデスネ！ワタシマセン！ ロシマス！」

（カシヤガシヤガシヤン　　ゴソゴソゴソ）

虎咆を畳んで、背中にしまいながらアレ（・・）を出す。

『　　ハリセン？』『　』

「あ～、出た」

回りは困惑した声をだすが、さすが明久。今のオレの心情に気づいたか。

「キシヤアアアアアアア！」

そして、再び二人が飛び掛つてくるが……もづく付き合つてられるか！

「……人の話は聞けえ！！！！！」

スッパアアーンン！！

「きやんつ！！！」

ハリセン、一閃が二人を直撃し、そのまま廊下に倒れこんだ。二人揃つて渦巻きに田を回していくが、ヤミが無くなつていた。

そして……

『Fクラス　島田美波　0点
Dクラス　清水美春　0点』

その間に、二人揃つて補習送り。
じぶん

「西さん！お願ひします！！」

「先生と呼ばんか、まったく」

そう言つて二人を僕のようだに抱いで連行していく。

「はつ～おのれ、黒井小鈴！次こそお姉さまのためにそのクビをさげてやる！！」

「鈴のばかあ～～～」

……疲れる。

「……さて、次は誰が相手だ？」

『『『『「うつ……』』』』

オレがDクラスの方を見ると相手は一步下がった。

「総員、攻め立てる！」

『『『『お、おうーー』』』』

攻め込むには好機と思い、号令を出す。止まっていた戦闘が再開される。……オレも参加したいが、気力がまだ戻らない。

「……リン、お疲れ」

明久が頭をポンポンッ叩いてくるがそれに若干癒される私がいた。そのリズムに合わせて、首元で鈴がリンッリンッと鳴り響く。

六話目（後書き）

早く戦闘をさせたいと思ったのですが… こうなりました。
アドバイス、訂正、感想をいただけたら嬉しいです。

七話目（前書き）

現実リアルを苦労した方。楽しんだ方。更新しました。

またも少し謎を出してしまいました。

PVが一万をかなり昔に超えていました。見て頂き感謝します。

「遅い！」
『くつー！』

『Fクラス 黒井小鈴 総合科目 757点 VS Dクラス 長谷部藤次 1131点』

敵の召喚獣が斧を振りかざしてくるのを戦斧の柄で受け流し、鉄扇でおもいっきり殴りつける。致命傷にはならないが間合いを空けることは出来た。

『くらえつ！』

『もうつた！』

今度は2体の召喚獣が左右から挟みこむように襲い掛かってくる。が、

「ふつ！」

『！？』

『何！？』

戦斧で床を叩きながら反動を使い、召喚獣を宙に舞わせる。挟み込むといつても突撃といった単純操作しかできないため避けるのは容易。召喚獣同士がぶつかり合い、互いの武器や衝撃で点数が減つていいく。

「ハアアアアアアー！！」

『

Dクラス 田中学 0点
Dクラス 柳川桜 0点

そこに上から追撃をし、相手は戦死となつた。

「——さあ、次は誰？」

『な、なんであいつ、あんなに召喚獣の扱いが上手いんだ！？似た（・・）ようなものを使つた事があるからな。例えればラジコンと人形操りの違いぐらいか？』

『おい！もう二、三人こつちに来い！』

何人かが集まつてきて物量で押し潰しにくるが、小鈴にはそれは好都合だった。

何せ、操作で勝つてこそいるが、点数自体は相手を下回つていてるため一撃で倒せるだけの威力がない。

混戦を利用し、相手を盾にしたり、障害物にしたりしてかわし、相手の攻撃の合間を縫つてヒット＆アウェーを繰り返して自分の点数を下げないようにしている。敵を倒すのは完全に二の次だ。もし、一人一人の連戦だったら、（多分）簡単には負けないが精神的な負担と味方の被害が拡大するだろう。

だから、敵が集まり、より混戦になればなるほど助かる。……しかし、

『吉井隊長！横溝がやられた！これで布施先生側は残り一人だ！』

『五十嵐先生側の通路だが、現在俺一人しかいない！援軍を頼む！』

『藤堂の召喚獣がやられそうだ！助けてやつてくれ！』

それでも、状況の劣勢化を知らせる声が響く。向こうは援軍を呼んだことで確実にこちらを押してくる。対し、こちらは作戦に必要な戦力保持で援軍が来ない。戦力保持で戦機を崩す！

今の叫びもあつて相手の士気はさらに上がっていく。ここは……無理矢理でも戦機を崩す！

「明久！」

「……ハア、わかつたよ。——Fクラス、吉井明久」

「同じく、黒井小鈴」

「——Dクラス、5名に化学勝負を挑みます！」

『…………なつ……？』『…………』

『Fクラス 黒井小鈴 化学 62点
Fクラス 吉井明久 化学 23点
Dクラス×5 化学 平均106点』

VS

『はつ！さすがに調子に乗りすぎだ！』

『操作の上手い黒井は後にして、そつちのザコを片すぞ！』

そう言って、一体の召喚獣がこちらの足止めに残り、三体は明久に襲い掛かる。でも…、

「よつ！」

『…ハアツ！…』

明久の方が、より操作が上手いんだ。それこそ手足のように動かせる。

明久の召喚獣は襲い掛かる相手の召喚獣を飛び箱みたいにして回避した。

『な、なんでそんな操作ができるんのよ…？』

再び襲い掛かる攻撃を床に伏せてかわし、打ち下ろされるこん棒の一撃は転がるようにして避ける。敵がナイフを投げてくれば木刀で受け止める。

一方的防戦だが未だにかすり傷すら負わず、点数が減っていない。

『何やつてんだ！早くしやがれ！』

『うるさい！わかるわよ！』

こっちを足止めしているのがそれを見て仲間に罵声を浴びせ掛ける。点数が低いのにトドメをさせず、ましてや攻撃を跳んでかわしたと同時に、召喚獣を足場にして地味に点数が減らされる。

壁に追い詰めたと思つたら召喚獣の股下を通つて逃げ、投擲したナイフが腰の動きだけでかわされる。

最早、悪夢を見せられているようだ。そして、――見すぎだ。

『つこの、いい加減くたばりやがれ！』

『往生際が悪いわよ！…』

『そりそり、諦めはきつぱりとしたら？』

『そりだ！いい加減やられ……』

会話に紛れ込んだ違和感に言葉が止まつた。

『ぐ、黒井！？遊佐と渡は！？』

先程まで足止めをしていた場所を見れば西村先生に連行されている二人の姿があつた。

「点差があつても、よそ見はダメだよ？じゃないと——」

『Dクラス 黒沢和樹 化学 0点』

「戦場じゃ戦死ぬよ？」

「戦死者は補習！」

『ギヤアアアアア！？』「あと、2！」

ここまででも十分崩したが、駄目押しが必要だ

『クツ、こうなつたら……』

『一人でも道連れに！』

そんなこちらの異常性に、相手は覚悟を決めたようで、特攻をしてくる。

：正直、その判断は間違つていない。連戦でこつちの召喚獣は操作が甘くなりつつあり、明久の召喚獣は一撃でも喰らえば間違いなく戦死する。一人じゃなれば成功していただろつ。

「よつ！」

「はつ！」

明久の召喚獣が木刀を相手の足元に投げ込む。それによつてすきだらけの体勢を見せることになり……、

「ラスト、1！」

後から投げた戦斧に喉を切り裂かれ、戦死となる。もう一人は体勢を立て直しが出来てなく、絶望的である。だから、決まつたと思つた。

『ぐ、クソオオオオ！』

ちょっとした余裕で油断。

敵の最後の悪あがきで、体勢も悪いのにナイフを投げつけ、——それが明久の召喚獣に真っ直ぐ向かう。

『『『『 - - あ-!』』』』

「 まづつ——」

明久に飛んでいくまさかのナイフ。避ける動作もできなかつた。

『 Fクラス 黒井小鈴 化学 0点』

「油断したな」

次の瞬間にはオレの召喚獣の左胸に突き刺さつた。

——投擲には気がついた。

だから気づいた時、割り込んで左手の鉄扇で防ごうとした。が、ちよつと(・・・・)間に合わなかつた。

少しの血を流し、床に倒れると、光と共に消えていく自分の召喚獣。それが消え去るのを見てから、手袋に包まれている自らの左手に目が移る。

「 はあ」

「リン.....」

明久が敵を戦死にして近くに戻つてきていた。

「受けきれると思つたんだがな」

「」

「 黒井、お前も補習だ」

「ええ、わかつてます」

明久がこちらを見てくるがあえて何も言わない。というより、何も言えない。

突然と現れる西さんを理由にして、補習室へと向かう。

.....相手戦力のいくらかは削れたんだ。

犠牲があるのはしようがないことだ。

勝ち負けはいつだつてあるもんだ。

——だから、そんな悲しい顔をしないでくれよ、明久。

七話目（後書き）

戦闘表現は難しいですね。次は地獄の補習室からお送りします（-。
?）

アドバイス、訂正、感想をいただけたら嬉しいです。

八話目（前書き）

遅れながら、タイラントさんから感想を頂きました。ありがとうございます。

今回、勝手にあるキャラの誕生日を設定してしまいました。

——鬼の補習室。小鈴は無事なのか！？

長くなりましたが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

——そいつは今にも涙を流しそうな顔をして、【私】を見ていた。何の親しみもない。何も感じない。ただ、知つていただけの存在。そんな奴が【私】にそんな表情を向けてくる。

(…………)

奴も【私】の事は知つている程度。親しみはないだろう。なのにそんな顔をしてくるのが印象に残った。

(…………)

周りは【私】を恐怖で見る。異物として扱う。危険物として見る。なんとも思わなくなつた【私】を何故、見る。何故、話かける。何故お前は、血まみれになつても【私】に笑いかけてくれる。

・・・

「起きんか、黒井！――」

「――ガツ！」

石と石が衝突する音と西さんの声で夢から目が覚めた。

しかし、頭に広がる鈍い痛みに頭を抱え込むことしか今はできない。

「……黒井、どんな石頭だ、お前の頭は？」

脇から聞こえる西さんの言葉に反応をして、見てみれば右手を振るつて痛みを誤魔化す西さんの姿があつた。

「……体罰は訴えられますよ？」

「痛みも知らんでまともな大人にできるか

それには同感だが、西さん以外の人はそれを免罪符に使うから気をつけてほしい。

西さんなしでまともな学園生活を送れるとは思えないし、西さんほどまともな大人は見たことがない。……あの時、西さんがいたら、

アレを解決できたのかな…………。

「……あ～寝てましたか。すみません。ちよつと悪夢を見ました。

ありがとうござります」

「……よく補習中に寝れるものだ」

一応、謝罪と礼を言つておくが、それを西さんが呆れた顔で見てくる。『あの』地獄送りになつてしまい、補習室で強制を強いられているが……意外にそんな大変ではない。内容の密度と量にはきつい物があるが、その他は普通の補習で、噂にあつた……洗脳道具が置かれている。

催眠術をかけられる。

鉄の鬼がいる。

間違うと石畳の代わりに一富金次郎を背負わされる。（正解すればゴーレムキンジ君がもらえる）

D E A D o r D E A T H

という話だつたがまったく間違つたものだつた。

……それと、驚く事に、西さんの教え方が上手いこと、上手いこと。今まで理解できなかつた所も分かりやすいし、じつこつた点を間違いやすいつてのもしつかり教えてくれる。

『――ウケ、ウケ、ウケケケケケ

『□□□□□ケツ！□□□□』

『…………（死んだ魚の田）』

「……お姉さま。美春は疲れてしましましたわ。でも、美春は、最期に、お姉さまの姿を見れて……しあわ……せ……」

「うう、あり・おり・はべり・いまそかり（いますがり）つて何よ？蟻・居り・侍り・今疎開つてどんな地獄図よ……」

……後は、環境さえまともならなあ。

「お前は平然としてるな」

「？普通じゃないですか？」

このぐらいで死んだ魚の田になつてたら知り合いと付き合いつだけで病んでしまう。

「そういうことじやない。…お前がこんな面倒」と（補習）を受けているのが意外なんだ」

「……ああ、そういう事ですか？」

確かにオレは面倒」とは「メンだと思つていて。テストも中ぐらい成績を收めていればいいし、平和である方が好ましい。別に今の状況に不満があるわけでもないからな。理由なしに戦闘はしたくないから、いつもなら適当に誤魔化すなりしていただろう。

「まあ、あいつが求めるからですかね」

「吉井か？」

「ええ」

（戦争開始前）

「明久」

回復試験を受けに行く前に、戦闘が始まる前に、明久に質問があつた。

「あ！リン！これから試験を受けに行くの？」

「ああ。その前にお前に質問しどきたくてな」

「質問？」

「……なんのためにとは聞かん。単純、お人よしのお前の事だから想像がつく」

「うわ、ちょっとひど」

「……聞きたいのは覚悟があるか、それだけだ」

「……覚悟？」

「そう」

背中から虎咆を取り出し、畳んだまま明久の方に刃先を突き付ける。「誰かのために何かする。良いことだ。けど、これは仮にも【戦争】何があるか、お前の場合はわからない。負ければ何が待つかわからない。さらに、勝つても何が起こるかわからないってこと」

「…………」

「戦争で誰かに拳を向ける。刃を向ける。その結果、誰かに恨まれる覚悟はあるか？」

戦死させられ、恨むかもしない。戦争に負けて恨むかもしない。何かを獲得する者がいれば、何かを損失する者がいる。勝者と敗者は表裏一体。

「…………」

「どうなんだ、明久」

「…………ない、かな。というより、わからないよ」

明久がどう言えбаいいのか言葉を考えながら出していく。

「誰かのためにつてより、僕が気に入らないからやりたいんだし。危ないのはしたくないよ? 痛いの嫌いだもん」

「…………」

「それに覚悟とか言われても、知らない奴らに恨まれるとか言われても困るよ。それにさーー」

明久は突き付けられた刃をよそに、苦笑しながら言つ。

「…………そんなの気にしてたら遊びすらできなくなーい?」

「…………フツ、フフフフアハハハハハ！」

…………まさか戦争の話で、遊びとか言い換えられるとは思わなかつた。

「なんで笑うのさー」

「笑うに決まつてるだろ。お前のバカは筋金入りだな」

「雄一よりはマシだ！！」

「――よし、Aクラスまで何とかするんだろ?」

「当然！」

「んじや、オレも全力で遊んでやる」

「うん、お願ひ」

虎咆を引っ込め、明久と別れた…………。

「……なのに、油断して戦死つて……ちょっと死にたいかも」

「待て、黒井。カッターを何処から取り出した?」

「離してください、西さん!オレには喉を裂くつて罰が必要なんです!」

「それは罰じやない!自殺だ!そんなになんとかしたいなら勉学に励め!」

お前は吉井が絡むと暴走するな!つと西さんがオレの行動を妨害していると音が流れた。

ピンポンパンボーン 『連絡致します』

「ん?放送か?」

「……声に聞き覚えがあります」

『船越先生、船越先生。吉井明久君が体育館裏で待っています』

「……」

「……おい、黒井?」

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

船越女史。年齢、四十五歳。、独身。婚期を逃したことで成績を盾にしてまで生徒に交際を迫る山婆。……おまけにオレのこともそういう目で見てくる。

そんな危険人物にそんなネタで呼べば明日の朝まででも体育館裏から離れないだろうが……。

『須川あああああああつ!』

つと、廊下から明久の雄叫びが聞こえる。フフフフ、そんなに死にたいか、ユウ!?!?

「……西さん、離してください」

「……補習中はここから出さんぞ?」

「ええ、大丈夫です」

(ガサガサガサガサ)

服の中を漁り、目的の黒い手の平大の箱を取り出す。

「(力チ) - - 『船越先生、船越先生。二年Fクラスの須川亮くんが「俺も負けられない!」と先生をお探しです。手には赤い『わ』付きのものを持っています。至急、お願いします』(力チ)」

「……黒井。それは没収だ」

「ええ、どうぞ」

西さんに遠隔操作機を渡すと廊下が騒がしくなった。

『船越先生、待ってください。試召戦争の立ち合いを願いたい——』

『邪魔しないで!須川君が持っているのは私の誕生石をあしらったルビーの指輪の婚約指輪に違いないんだから!』

そのまま生徒をものともせずに廊下を船越女史が通り過ぎていった。

「…………」

「西さん。眉間にシワが寄りますよ?それと、次はこれを教えてほしいんですけど?」

「…………もういいのか?」

「はい、生きないとならなくなつたので」

そう、ユウに死が救いに感じるようになつた。

……そういえば、須川は数学テストは『赤丸』が多かつたな。どうでもいいけど。……フフ、ユウ。終わつたら、遺書を用意しとけよ?遠くで誰かの叫び声が聞こえた気がしたが、無視して苦手な国語を西さんに聞く。……あ、そういう考え方ね。他人の考えは難しいね、ほんと。

八話目（後書き）

書き方が安定しません。毎日更新できる方々を尊敬します。
アドバイス、訂正、感想をいただけたら嬉しいです。

九話目（前書き）

なんとか間に合つた、という感じです。しかし、かなり強引になりました。

小鈴に新たなスキル！？

明久、無自覚の行動！？

どういうことかは本編にて。

長くなりました。少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

○クラス代表
平賀源一
討死

この知らせによりFクラス勝利が決定した。それにより、補習室からも開放された。（西さんが部屋から解放したと同時にその情報を聞いたのだが、あの人は妖怪センサーならぬ、戦死者センサーでも付けているのか？）

だが、それはこっちにとつて好都合でしかない。今も勝鬨の叫びを上げ続いている廊下にユウがいるに決まっているからな。案の定。Dクラスの目の前でうな垂れているDクラスの生徒と、喜びまくっているFクラスの生徒。そして、包丁を握っていた明久の右腕を捻り上げている外道の姿があつた。

「雄一、笛で何かをやり遂げるって、素晴らしいじゃね？」

卷之三

「僕、仲間との達成感がこんなにいいものたなんて今まで知らなかったんだよ。」

「今何をしようとした？」

に痛い！

「おーい。誰かペンチを持ってくれー！」

立派な方があの前を待つてゐる。」

抗をすれば紅い噴水が起るだろう。

で苦無つて呼ぶ位、あつさりヤレルから暗殺に多様されるんつて。「……にやーつて、鈴、お前髪が一部黒くなつてるがまさか……」

髪が黒くなつてゐる？ああ、そこまでムカついていたんだ。でも、まだ一部でよかつたじゃん。

「一部こやじり半殺しきらいで止まるんじやこやーかな？」

空いている手をコウの襟首にかけ、持ち上げる（・・・・・）。コウの身長は180近い。対して、オレは150+。周りがその異常な光景に固まっているがなんことは知つたこつちやない。首が絞まりかかっているのを両手で塞ぎながら抵抗しているコウを持ち上げたまま移動しようとする。

「——あの、クロさん？」

しかし、それを呼び止める猛者がいた。自分でもなんだが近寄つたら噛み殺すくらいの普通の殺氣を周囲に漂わせていたと思ったのに。感情を隠さないままに声へ顔を向ければそこにはDクラスの女生徒。ショートカットにすまし顔、ちょっと鋭い目だがきれいな女の子と、その後ろには青みがかつた髪でこちらに怯えながらも正面に立ちふさがる顔色の悪い男子生徒がいた。内、片方には知り合いだった。

「……なんにや、タマちゃんか。にやんか用？」

女生徒の方。玉野美紀は店に所属してもらつていて、店員をやつてもらつていて。ある程度は信用も信頼もしている。

「……クロネコ化してるとこり、止めたくないのですが、その、戦後対談を代表がしなくてはならないのでそちらの代表の処刑を待つていただきたいのですが……」

戦後対談？まだされてにやかたんか？……仕方によい。後、処刑なんてんな面倒なことはしないよ？

「ホレ、ユウ。サッサと終わらせて華死合するんだから」

「ガツ！ハツ！ゼエツゼエツ、死ぬかと思った。つてか、鈴！今、話し合いがおかしくないか？」

「……サッサとヤレ

「イエスマム！」

オレの感情を逆に無くした声にコウは怯えながらも前にいる男子生徒と戦後対談を始めた。あ、Dクラスの代表だつたんだ、彼。

「——あの、クロさん。それともう一つ話があるんですが……」

ユウが逃亡しないように影を踏みつけながらどう始末をつけようか

と考えていたら、申し訳なさそうに玉野が話しかけてきた。

「ロクラスでの店の半営業停止なのですが、撤回していただけませんか？ その、ウチのクラスメイトが失礼な事を働いてしまったのは申し訳ないのですが、一部の暴走ですの……」

「営業停止？」

「……ああ！ あれか。そういうえばそんな事を決定したな。でもなあ——、

「リン？」

……しまった。失念していた。戦後対談なんて明日、ミイラにしたユウが勝手にやれば良いのになんて止まつたんだ、オレ！

背後からアーッの声がする。つと/orか、いつの間に背後を取られてた！？（最初からです）

「……でもなあ、タマちゃん。あんないきなり暴力に走るよつな連中相手には商売は危くない？」

「それは本当にすいません。私と代表が席を外している時に起つてしまつたのです」

「ちょっと、リン？」

「……二人が抑止力になるのは知つてるよ？」道部期待のホープに熱血系の代表だからね。でも、鬼がいないからつて洗濯を通り越して暴走つてのは、ねえ？」

「無視！？ 無視だよね、これ！？」

「すぐに何とかします。どうかチャンスをいただけませんか？」

それと、あの、その、後ろの吉井君を無視してていい——

「わかった！ 見逃す！ んじや、ユウとの華死合に行つてぐら……」

……

触れられたくない話を無理矢理終わらせ、ユウの襟首を掴んでこの場から離れようとした。が、その前にオレが襟首を捕めた。

「……リン？」

「……まづい。抵抗不能だ。けど、せめて今日ぐらこは明久と向き合

いたくない。というより、合わせる顔がない。

「……あー、そのー、明久？離してくれにゃい？オレ、ユウと華死合をしにやいと……」

「こっち見てよ」

強制する声ではない。しかし、逆らえない。声に悲しみが入つている。けれども顔を向き合わせたくない。ならば——

「土下座したらリンのこと、すずつて呼ぶよ？」

「それはヤメテ！！」

それはイヤダ。明久にリン以外で呼ばれるのは勘弁被る。

大声を出しながら振り向いたため、明久の顔が目鼻の先に現れる。

「うつ、いや、あの、えーっと……」

自分でも目が泳ぎまくっているのがわかる。それでも何かを言いたかったのだが、それより先に明久に行動された。

「リン」

「えっ！あう／＼／＼／＼」

明久の両手が頬を挟み、強引に目線を合わせるようにする。互いの髪の毛が触れ合うほど顔を近づき、顔がマグマのように熱く感じる。

「……リン、ごめん！」

目線が合わさった状態から明久が地面に叩きつけると言わんばかりの勢いで頭を下げてきた。

「え！？あ、ちょ、明久、何——」

「僕の油断の所為でリンを戦死送りにして、ごめん！」

あの時に、自分が避けていれば。自分が木刀で弾くなり、受け止めたり出来ていれば。そして、自分が戦死になつていれば……、しかし、それには納得がいかない。

「……あー、明久。それは違うぞ？」

「えつ？」

「それじゃ、オレがお前のために犠牲になつたみたいじゃないか？」

「違うつての」

「…………」

「あれは互いに気付いて、オレが行動できた。互いに生き残るために割り込んだんだ。……けど、その、操作が上手くいかなくって受け損なったんだよ！」

犠牲になるなんてそんなので満足するように思われるのは「ermenだ。それでも、自分のミスを口に出すのは少々恥ずかしい。

「だから…謝罪なんか困るし、いらない！」

さすがにぐさい事を言ってしまった自覚が感じられ、明久との視線を強引に逸らす。

「——じゃあ、リン。…………ありがと！」

「……フンッ！／＼／＼／＼」

明久が軽く笑いかけてくるのを横目で見ながら、少しでも顔を見せないようにさらに横を向く。廊下を通る風が涼しく感じる。

「でもや、やつきは無視しなくてもいいじゃんわあ」

「うう！」

さつきをやってしまった行動で触れられたくない話題に入ってしまった。

「ねえ、なんですか？」

「いや、その、だつて……宣言して早々たいしたこと�이出來なかつた自分が、その、情けなくつて……」

明久に覚悟がどうとか訊ねときながら自分は速攻で戦死とか呆れるくなる。その辺の感情の整理が済むまで明久とは顔合わせをしたくなかったのだ。

「たいしたことできなかつたつて……」

「すみません。口を挟ませてください」

半ば一人だけの会話になっていたところに参入者が現れた。

「えつと、たしかーーー」

「どうも、Dクラスの玉野美紀と申します。よろしくお願ひします、

吉井くん

「あ、うん。よろしく、玉野さん」

「さて、脇で話を聞かせてもらっていたのですが、（たいした事はしていない）というのは反対させていただきます」

「？」

「「ひいらのクロさんだけの被害が『戦死者6名。回復試験受け直しの者、11名（内、1名戦死者）』と上っています。これは「ひいらには十分な被害でした」」

「「うわっ、リンだけでつです」」こじちゃん

「「ですでにたいした事はできなかつた、とは言わないでください」」

「「そうだよ。十分、大活躍だよ！」」

「「うっ、……わかつたよ」」

「本当はその程度では納得していないのだが、折れとかないと面倒なことになる気がした。」

「「ありがとう、玉野さん。おかげで助かつたよ」」

「「……いえ、「ひいらの言いたい事を言つただけです／＼」」

「あ、明久の（ハートショットスマイル）がタマに至近距離で直撃した。……まだだけど、墮ちるのは切つ掛け次第か？これ以上増えるのも困る。」」

「「んじや、タマちゃん。半営業停止は取り消すけど、次は暴行に走らないように注意して」」

「「えつ？あ、はい！」」

「強引だが、ここで話を終わらせる。」

「「それと、コウ。話はいい加減終わつてるよな？」」

「（ビクンッ！）お、おお。終わつてるな」

「すつかり空氣になつて忘れ去られていたが、その間に逃げ出す事もできなかつたためこひいらに意識を向けられて慄いている。」」

「「」」の後はどうなつているんだ？」

「「あ～、明日に消費した点数の補給を行うから特にない、です」」

「「んじや、解散、帰宅だな？」」

「「えつと、そうです、はい」」

「なんかコウからドナドナが聞こえてくる気がするし、諦めの表情を

している。けど、

「なら、帰るぞ、明久」

「え?」

「あ、うん」

なんかもうそんな気分じゃないし、窓に映る自分の姿も、髪が元の白にもどつていてるし。

「ウの影から足を退けて自分の荷物を取りに教室に向かおうとする。「んじや、お疲れ様でした」

「お先に——あ」

明久が思わず出たような声に視線を追つてみると疲れたような表情のユウに姫路が近づくところだった。

「……ねえ、リン」

「ん?」

「帰つたら、勉強教えてよ」

「いきなりどうした?」

「……少しは役に立ちたいなと思つてさ」

ああ、姫路のためのこの戦争。しかし、ユウのように作戦を立てたわけでも、戦果を上げたわけでもないから、自分を鍛えたいって所か?

「……OK。西さんじこみの勉強を教えてやるよ」

「ちょ!? 鉄人みたいなのはごめんだよ!—」

「ハハハハハハツ!」

本気で焦っている明久に思わず笑いが出てくる。

……次こそは最後まで明久の役に立つようにオレも頑張らないとな。

九話目（後書き）

バカテスのキャラ。アニメと漫画。原作で違いますよね？

玉野さんは漫画を。D代表（平賀）はアニメを参考にしました。玉野はあるきつかけで原作に近くはしますが、こんなふうにします。小鈴の謎はまだあります。徐々に出します。

来年もよろしくお願ひいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0900z/>

バカとリンと召喚獣

2011年12月31日19時50分発行